

幼稚園教育の音楽活動と電子楽器の適用についての研究

幼稚園における音楽活動と電子楽器、
機器の導入についてその現状調査から

Kindergarten Musical life vs. the adaptability
of Electronic Musical Instruments

The research into the introduction of Electronic Musical Instruments
and devices in Japanese Kindergarten Musical Life today

服部 公一¹・川合 貞子²・草川 和子³・松嶋 五百子³
村木 由起子³・片岡 真弓³・成松 由奈³

Koh-ichi HATTORI, Teiko KAWAI, Mutuko KUSAKAWA
Inako MATUSHIMA, Yukiko MURAKI, Mayumi KATAOKA and Yuna NARIMATU

I はじめに

幼稚園の音楽活動においてピアノは重要な関わりをもち、その存在はきわめて高い。しかし、保育者の中には保育者養成校に入って初めてピアノを学ぶ者もあり、伴奏や即興を自在にこなせ、良質な音楽表現を共有し指導できるレベルまで求めることはなかなか難しく、このことが保育者にとってかなりの負担になっているのが実情¹⁾である。生演奏に勝るものはないが、音楽活動にピアノ自動演奏装置、さまざまな機能をもつ電子楽器を導入することは保育者の負担が軽減されるばかりでなく、ある一定水準の音楽を提供することが可能になり、その適用効果は大きいと考える。本園ではピアノ自動演奏装置の活用と有効性を検討すべく積極的に導入、その様子を各保育室に設置したビデオカメラに収録、現在事例研究の資料収集の段階である。

II 研究の目的

本年度は本研究の一環として、幼稚園における音楽活動と電子楽器、機器の導入について、

他園へのアンケート調査を行い、保育現場での使用実態やその利用の可能性、保育者の意識を考察することを目的とする。またその調査には保育者養成校のカリキュラム検討の際の資料も含み、あわせて考察する。

III 研究の方法

平成12年7月～13年5月にかけて本学卒業生の就職先私立幼稚園200園²⁾と研究者講演会の参加者園100計300園(主に関東)に対しアンケート調査を依頼、回答を得た121園(40.3%)の集計、分析をする。

回答は無記名を可とし郵送にて回収。

IV 仮説

幼稚園では音楽活動の果たす役割は大きく保育現場で使用する楽器としてピアノ重視の傾向は強い。特に歌唱の伴奏楽器としてその依存度は高く、電子楽器や自動演奏装置など新しい機能を有効に活用している園はまだ少ないのではないかと。しかし、保育現場の実態や要望からそれらの導入の可能性が考えられるのではないかと。これらを仮説として検証する。

1 音楽第3研究室

2 児童心理学研究室

3 みどりヶ丘幼稚園

V 結果と考察

(1) 調査園

問1 創立年数、園児数、クラス数、教員数（選任、非常勤）、園の特徴的教育方針（記述）

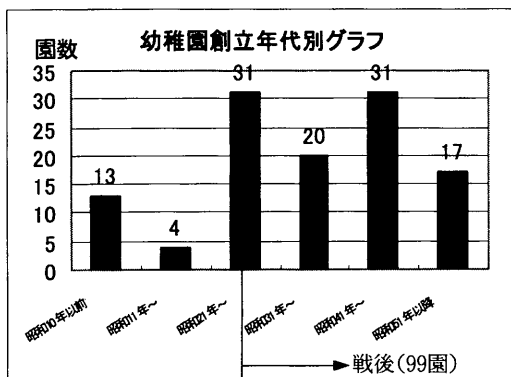
① 園の創立

<表1-a>

有効回答120

年代	園数	割合
昭和10年以前	13	11.2%
昭和11年～	4	3.4%
昭和21年～	31	26.7%
昭和31年～	20	17.2%
昭和41年～	31	26.7%
昭和51年以降	17	14.7%

<グラフ1-b>



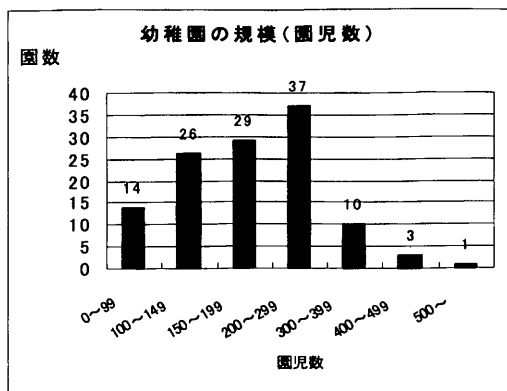
最も古い園は明治39年、最も新しい園は平成13年の創立であった。昭和21年～昭和30年と、昭和41年～昭和50年が各31園(26.7%)の創立が2つのピークとして際立っている。これは第1次と第2次のベビーブームと関係があるようだ。戦後の創立が99園(85.3%)と多く、戦前の創立園は17園(14.7%)である。平成になってからの創立は2園と少ない。少子化になるにつれ減ってきていると考えられる。

② 園の規模

<表1-b> 園児数 有効回答120

園児数	園数	割合
0～99名	14	11.7%
100～149名	26	21.7%
150～199名	29	24.2%
200～299名	37	30.8%
300～399名	10	8.3%
400～499名	3	2.5%
500名以上	1	0.8%

<グラフ1-b>



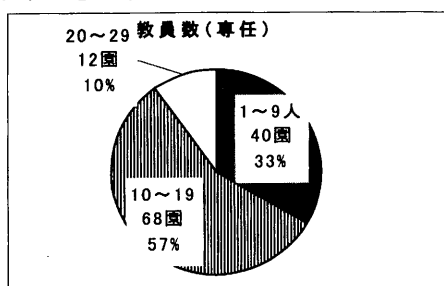
200名～299名が一番多く37園(30.8%)である。園児数の平均は198.8名。最大は550名(19クラス)、最少は一番新しい創立の40名(3クラス)である。300名までの園が約9割(88.3%)で、300名を超える園は急に少なくなっている。縦割りクラスの園、年少のない園、年長のない園が各一園であった。年少の平均は2.3クラス、年中の平均2.7クラス、年長の平均2.7クラス、園全体の平均は7.76クラスであった。

<表1-c> クラス数 有効回答数120

学年 クラス数	年少	年中	年長
1	24	10	8
2	54	51	52
3	25	36	31
4	8	16	18
5	5	4	6
6	2	2	2
7	0	1	0
8	0	0	1

③ 専任教員数

<グラフ1-c>



専任教員数は10～19名のところが一番多かった。平均は11.85名。最少5名，最高29名であった。非常勤をおいている園が64園，全体の約半数（53.3%）あった。

④ 園の特徴的な教育方針（自由記述）

宗教色のある園が22園（仏教9，キリスト教8，他）リトミック，オルフなど何らかの音楽教育を強調している園が11園，「明るく」「元気」「のびのび」といった表現を特徴とする園が24園，「よく遊び」という言葉がかかかれている園が21園あり，同じような割合でそれぞれの園の特徴がイメージされる。「思いやりのある子」という表現も多かった。

（2）音楽活動の位置づけについて

問2 保育の中で音楽活動をどの程度重視されていますか。（選択、記述）

1. 大変重視している
2. 重視している
3. あまり重視していない
4. その他

* 1. 2と答えた方

どのような時、場合、状況ですか。

（自由記述）

<表2> 音楽活動の位置付け 有効回答120

大変重視している	重視している	あまり重視していない	その他
19園 (15.8%)	84園 (70.0%)	11園 (9.2%)	6園 (5.0%)
103園 (85.8%)			

「1. 大変重視」19園（15.8%），「2. 重視」84園（70.0%）合せて103園（85.8%）が保育の中で音楽活動を重視していると答えている。音楽は子どもの育ちに大切なものと位置付けられている。「4. その他」に答えた6園も3園は「他の活動と同等に扱う」とし「楽しく導入」「音楽表現活動は重視」とコメントがあり，重要視していない訳ではなかった。重視している場合どのような

状況かについての自由記述を分類すると，場面，状況では子どもたちが歌う場面が最も多く，つづいて踊り，合奏，行事（音楽会，誕生会，運動会，卒業式）の場面であった。その他は「興味を育てる」「心を育てる」「身体を作る」など子どもの育ちのなかで音楽活動を大切に考えている記述が多かった。又，リトミック指導，オルフの音楽教育，絶対音感教育，発声などかなり専門的な音楽の指導を打ち出している園も11園あった。いつも音楽をBGM的に聴かせたり，感性を育てるために良い音楽を聴かせる活動をしている園もあった。「楽しく歌う」，「技術的指導より幼児の感性を養うことを目指す」，「歌唱を楽しく意欲的なものへ育てたい」など楽しむ活動として音楽を捉えている記述がみられた。音楽活動抜きで幼稚園の生活はありえないといえよう。

（3）園で使用されている鍵盤楽器について

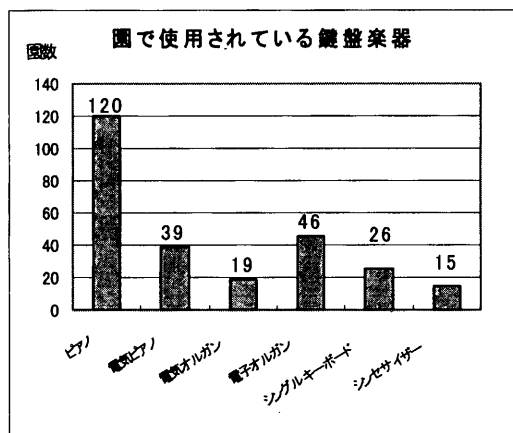
問3 先生方は、園でどのような鍵盤楽器を使用されていますか。（選択）

1. ピアノ
2. 電気ピアノ（クラビノーバ等）
3. 電気オルガン（学校用オルガン等）
4. 電子オルガン
（エレクトーン等；三段鍵盤→手鍵盤2段、足鍵盤1段）
5. シングルキーボード
（持ち運びのできる、手鍵盤1段のもの）
6. シンセサイザー
（音を作り出す機能のあるもの）
7. その他

<表3-a> 園で使用されている鍵盤楽器
有効回答121（複数回答可）

楽 器	園 数	割 合
ピアノ	120	99.2%
電気ピアノ	39	32.2%
電気オルガン	19	15.7%
電子オルガン	46	38.0%
シングルキーボード	26	21.5%
シンセサイザー	15	12.4%

<グラフ 3-a>



121園中、電子オルガンのみを使用している1園を除いて120園(99.2%)でピアノが使用されている。鍵盤楽器は全園に設置されているといえる。ピアノのみ使用の園は38園(31.4%)で約三割。これに対し残りの83園(68.6%)約七割はピアノ以外にも何らかの鍵盤楽器を保育に使用しており、それらの中で最も多く使われているのは電子オルガン46園(38.0%)、ついで電気ピアノ39園(32.2%)、シングルキーボード26園(21.5%)電気オルガン19園(15.7%)、シンセサイザー15園(12.4%)であり、電子楽器がかなり普及してきていることが分かる。

ピアノと他楽器が各クラスにどのような割合で入っているかは今回不明であった。また、ピアノも園全体に一台なのか各クラスに配置されているのか判らなかった。「持ち運びが簡単」という点ではシングルキーボードの数値がもっと高くてもよいように思われるが、音色やリズム、音量など、音楽的な機能がより高度な電子オルガンの数値のほうが高い。もっとも低いのはシンセサイザーだが、これは他に比べて高価な上、専門的で複雑な機能を使いこなす難しさがあると思われる。

(4) (3)の鍵盤楽器以外で歌の伴奏に使っている楽器について、又その感想

問4 先生方は、問3の楽器以外にどんな楽器を歌の伴奏に使っていますか。又、その感想をお聞かせください。(記述)
例) ギター、オートハープ、アコーディオン、ピアノカ等

鍵盤楽器以外の楽器を使用しているのが、約半数58園(47.9%)であった。記入があった楽器の中で、一番多いのはピアノカ27園(22.3%)で、次にアコーディオン16園(13.2%)、ギター8園(6.6%)であった。「その他」に挙げられた楽器も含め、どの楽器も移動しやすく、持ち運びが便利という共通点がある。ピアノのマイナス面を補う楽器として自由にこなせたなら重宝すると思われる。

ピアノカの使用が多いのは、個人持ちができ、子どもにも扱いが容易であり、旋律楽器として使いやすく、持ち運びに便利であること、また、小学校低学年でピアノカを使用するところも多く、一斉指導の楽器として導入されているからであろう。また、機能が単純で、保育者も習得しやすい楽器であることも理由のひとつであろう。

<表 4-a>

(3)の鍵盤楽器以外で歌の伴奏に使っている楽器
有効回答 121園

使用していない(=無回答)		63 園(52.0%)
使用している 重複回答可		58 園(47.9%)
使用している楽器の内訳	ギター	8 園(6.6%)
	オートハープ	0 園
	アコーディオン	16 園(13.2%)
	ピアノカ	27 園(22.3%)
	その他 エコー、大太鼓 ウクレレ トーンチャイム ハンドベル カスタ、鉄琴 リコーダー ハーモニカ トランペット ドラム	11 園(9.1%)

<表4-b> 使用している園の感想
(自由記述47園・無回答11園)

感想	園数	内訳	園数
環境作り	20 (16.5%)	興味	10
		雰囲気や新鮮さ	6
		幼児の使用が容易	4
行事に使用	13 (10.7%)	戸外	10
		クリスマス会、七夕、運動会、誕生会	3
持ち運びに便利	4 (3.3%)		
教育効果を期待	4 (3.3%)	小学校の準備	2
		一斉指導	1
		階名唱を覚える	1
特記	6園 (5.0%)	これから使用したい	3
		演奏が難しい	2
		アコーディオンが難しい	1

行事に使用する園が13園あった。戸外活動(散歩、遠足)、運動会での利用は場所的にピアノの使用は不可能であろうから当然と考えられる。アコーディオンやギター等特定の楽器を所有する園では、園内にそれらの楽器を得意とする保育者がおり、他の行事、クリスマス会や七夕、誕生会で使用されているようだ。

ギターやアコーディオン等は演奏が難しいと回答した園が2園あるが、保育者が新しく楽器を習得する時間的な余裕がないことを示しているようである。使用してないが、これから使用したい、使用したらよいだろうと3園が回答している。鍵盤楽器以外の楽器を使用していない園が63園(52.0%)あることは、上記のピアノや電子楽器だけで歌の伴奏をしていると考えられ、鍵盤楽器への依存が高いといえる。多様な伴奏形態の可能性を追求してもよいのではないだろうか。

(5) (3) (4) の回答以外で保育に使用されている電子、電気関係の楽器、機器の使用とその状況について

問5 問3の回答以外で保育に使用されている電子、及び電気関係の楽器、機器があれば書いてください。(自由記述)
例) 自動演奏装置、自動伴奏装置(カラオケ装置や伴奏君等)、CDプレーヤー、ラジオカセットデッキ等

<表5-a>

保育に使用されている電子、電気関係の楽器・機器の使用 有効回答116園(複数回答可)

種 類	園 数	割 合
自動演奏装置	8	6.9%
自動伴奏装置	2	1.7%
CDプレーヤー	104	89.7%
ラジオカセットデッキ	102	87.9%

回答があったのはいずれも直接生演奏をしないですむ機器、装置である。

本園で導入している自動演奏装置、伴奏装置を所持する園は8園、カラオケ装置や持ち運びに便利な伴奏機器は2園と両方あわせても10園(8.6%)と現状においてまだまだ少ない。それに対して楽器以外の機器として、90%近い園はCDプレーヤー(89.7%)ラジオカセットデッキ(87.9%)を保育に生かしている。使用状況で自由記述をまとめてみるとつぎのとおりである。

自動伴奏装置・自動演奏装置

- ・集会や行事などに生かしている園が多い
- ・BGMとしての役割、お遊戯や音楽表現のように体を動かす活動によく使われる。
- ・子どもの歌の伴奏には使わないとコメントされた園があった。
- ・ピアノの不得意な保育者のクラスに配置する園があった。

この10園のうち3園は園の方針に音楽教育に力を入れているところである。10園とも宗教とのかかわりが無い園であった。

<表 5 - b>

自動演奏装置/自動伴奏装置の使用状況

装置を利用している 10 園（自由記述）	
1	自動演奏は卒園式等に利用している。 CD プレイヤーは毎日のリトミック体操に使用
2	集まり時、行事（誕生会等）
3	演奏装置は主にダンス用。
4	プレイヤー、各組、制作の時のBGM、昼食時の BGM、動きのリズム、ダンス、自動演奏装置、1 台ピアノ不得意な先生のクラスに配置し、歌の指導の一部で使用
5	日々の保育の中の音楽リズムや運動会、夕涼み会、お遊戯会等の行事まで、幅広く使用
6	日常保育(踊り、遊戯)運動会、お遊戯会
7	時々、お弁当時、ダンス、体を動かす
8	演奏装置はあるが、歌の演奏には使用せず。
9	伴奏装置は誕生会の入場のシーンの音楽に使用
10	月 1 回の音楽朝会、運動会、生活発表会

CDプレイヤー・ラジオカセットデッキ

- ・戸外に持ち出せることから戸外集会、野外活動・運動会やさまざまな行事にいかしている園が多い。
- ・子どもたちのリズム遊びダンス、表現活動に生かしている。やはり持ち運びやすく、好きな場所で使える便利さが強調されている。
- ・子どもにも使わせているように操作がやさしいという利点もある。
- ・BGMを流したい時に活用している園も多い。一般的に出回っているCDやカセットテープなどが使い利用しやすい利点があげられる。
- ・分類しにくいほどに利用状況がさまざま、保育全体の活動に広く使われている。
- ・本園で新しく取り入れたQコードの名前は見られなかった。

他に、特記すべき園でDTM（パソコン利用DTMシンケンサーソフト+音源モジュール）を使用し、劇遊びなどのオリジナル曲の作成、既成曲のアレンジなどに使用、又伴奏用にデータを打ち込みしている園が1園あった。

- (6) 生伴奏の代わりにカラオケや自動演奏等の機器を使うことについて

問 6	生演奏の代わりにカラオケや自動演奏等の機器を使うことについてどう思われますか。 (自由記述)
-----	---

<表 6 - a> 記述内容の分類 有効回答108園

自動演奏等の機器使用 についての是非	園 数	割 合
よい	24	19.8%
条件付き（肯定的）	35	28.1%
条件付き（否定的）	12	9.9%
よくない	37	30.5%

<表 6 - b> 感想の分類 (自由記述)

よい	教師の指導のし易さ	9
	よい	5
	正確な演奏（リズム・音程）	4
	ピアノの不得手な教師によい	*4
	活動の幅を広げる	2
	今後活用したい	1
条件付きでよい（肯定的）	特 記 全自動装置に教師が頼ってしまうことによる危機	
	目的による	20
	教師の指導のし易さ	8
	行事	2
	曲による	2
	ピアノの不得意な教師によい	*2
	行事 戸外	1
	年齢による	1
	今後活用したい	1
	特 記 音質のよいもの・時代の変革	
条件付きでよい（否定的）	生伴奏がよい	9
	目的による	5
	教師の指導のし易さ	3
	行事 戸外	4
よくない	自然の音がいい（生演奏）	16
	良くない	13
	機器は幼児への対応が不可能	8

(3) で明らかなように、ピアノ以外の何らかの鍵盤楽の使用が7割近いのに対し、自動演奏や自動伴奏装置を使用している園はまだ10園(8.6%)しかない。

生演奏の代わりにカラオケや自動演奏等の機器を使うことが「よい」と「条件付きでよい」の園は59園、否定的ではあるが条件付きでよいを含めると71園(65.7%)である。この事は、多くの園で今後の自動演奏装置使用の可能性を含んでいると考えられる。

しかし、条件を付けての賛成が多いことから、積極的な導入に賛成な園はまだ少なく約20%であった。幼児期の音楽的環境は、子どもと保育者が一体となって楽しむことが最も大切である。機器の使用によって、保育者の指導のし易さ、保育者が子どもと一緒に歌える、踊れる、子どもの実態をより理解できる等を記述している園が、21園にのぼる。これは自動演奏装置使用の一番の利点と考えられる。「よくない」と回答した園37園では、「教師が機器に頼って保育してしまうのではないか」、「使用すると、保育者の生演奏技術が上達しないのではないか」と心配している。否定的な園、「よくない」と考えている園では、記述に「良くない」「必要なし」「生演奏に勝るものなし」等と、否定の表現が激しく感じられ、生演奏への強い拘りのあることがわかる。又、電気機器の人工音を危惧する回答も見逃せない。

保育者の演奏技術不足から使用によいと回答した園は、6園(*)と少ない。

今回の調査園は、音楽教育を重視している園が85.8%と非常に多く(表2)、保育者の採用時にピアノの実技試験の実施園が80.7%と多い(表8-a)。また、次の(7)結果からも明かなように、ピアノ伴奏の不得手な保育者が少なく、現状であえて新しい機器を導入する必要や意志がない園が多いとも考えられる。

(7) 園の先生方のピアノ演奏能力について

問7 先生方のピアノの演奏能力をどのように感じられますか。該当する答えに人数を書いてください。(選択記入)

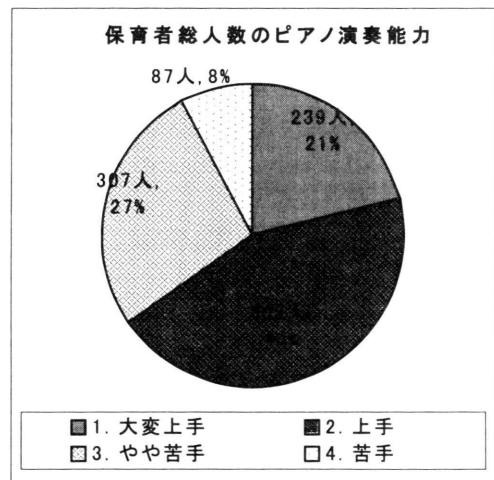
1. 大変上手であると思う (人)
2. 上手であると思う (人)
3. やや苦手ようである (人)
4. 苦手ようである (人)

<表7-a>

保育者総人数のピアノ演奏能力 有効回答112

回答番号	人数	割合
1. 大変上手であると思う	239	21.0%
2. 上手であると思う	505	44.4%
3. やや苦手ようである	307	27.0%
4. 苦手ようである	87	7.6%
合計	1138	100.0%

<グラフ7-a>

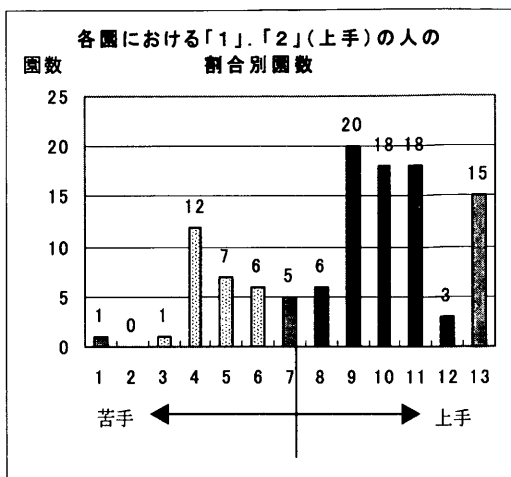


演奏能力の優劣については、各々アンケート回答者のレベル基準や演奏場面が異なるため客観的評価や結論の信憑性にかけるが、1と2と答えた場合、安心してみていられる・満足している状況と考えられる。又3と4を選んだ場合は、能力に何らかの不安を持ったり、保育現場で満足に弾けていないと考えられる。保育者の総人数(1138人)のうち、「1. 大変上手」239

人(21.0%),「2. 上手」505人(44.4%), 合わせて65.4%が上手に弾ける保育者と考えられ,「3. やや苦手」307人(27.0%),「4. 苦手」87人(7.6%)に対し, 相対的に弾けると思われる保育者のほうが多かった。

また, 園内で上手な保育者が51%以上いる園(表7-bのno.8~13)は80園(71.4%)と予想外に多かった。上手と苦手が半々と思う園は5園(4.5%),「やや苦手」「苦手」な保育者が多い園(no.1~6)は27園(24.1%)で約4分の1園であった。さらに, 保育者の全員が「1. 大変上手」,「2. 上手」とする園は15園(13.4%), その中でも全員が「1. 大変上手」とされる園が3園(2.8%)あった。この3園のうち1園は音楽活動に力を入れている園, うち2園は採用時, ある程度弾ける人を採用するとあった。保育者全員が1と2の上手とする園15園のうち2園に自動演奏装置が入っており, 3と4の苦手が多い園には入っていないことから, 弾けない保育者が多い園で自動演奏装置を取り入れているとはいえない現実があるようだ。

<グラフ7-b>



(8) 園の採用試験における音楽課題の有無とその課題内容について

問8 採用試験時、音楽課題は入っていますか。
具体的に課題は何ですか。
また、音楽課題は採用時どの程度重視しますか。(記述)

<表8-a>

採用試験時の音楽課題とその内容 有効回答114園

<表7-b>

有効回答112

グラフ軸 No.	各園における「1 大変上手」,「2. 上手」の保育者が占める割合	園数
1	0%	1
2	1%~9%	0
3	10%~19%	1
4	20%~29%	12
5	30%~39%	7
6	40%~49%	6
7	50%	5
8	51%~59%	6
9	60%~69%	20
10	70%~79%	18
11	80%~89%	18
12	90%~99%	3
13	100%	15

音楽課題			
ある 92 園 (80.7%)		なし 22 園 (19.3%)	
課題 内容	自由曲 64 (69.6%)	理 由	・当然マスターしているもの
	課題曲 27 (29.3%)		・既習とみなす
	初見奏 24 (26.1%)		・ピアノ伴奏ができる
	バイエル、ソナチネ 5 (5.4%)		・ソナチネ以上の経験
	その他 3 (3.3%)		・楽器が弾けることが必須
			・性格重視、人間性
			・好き、楽しめれば良い
			・特別重要視しない(3 園)

<表 8 - b>

音楽課題がある園での重要度について

自由記述のあったものの分類 (92園)

重要度レベル	重要視する	34 園	42 園	62 園 (67.4%)
	50%重要視	8 園	(45.7%)	
	弾けるのが前提	1 園	20 園 (21.7%)	
	30%前後	6 園		
	10%から 20%	3 園		
	ある程度	4 園		
	参考程度	2 園		
	普通に弾ければ	1 園		
	必要程度	1 園		
バイエル、ソナチネ以上	2 園			
	人間性を重視	5 園	9 園 (9.8%)	
	音楽を楽しむ・音楽が好き・表情が生き生き、雰囲気	4 園		
	特に、あまり重視しない	3 園	(3.3%)	
	その他	8 園	(8.7%)	
	無回答	10 園	(10.7%)	

92園 (80.7%) の園で採用試験にピアノの課題が出されていた。この数字は、依然として採用試験でピアノが重要視されていることを示す。課題では、自由曲を弾かせるところが一番多く (69.6%) 課題曲を指定している園 (29.3%) がそれに次ぐ。いずれも子どもの曲の弾き歌いが多かった。初見奏 (26.1%) が要求されているのは、今後養成上のピアノの教育にも1つの示唆を与える。ピアノの課題がないとする園でも、「ソナチネ以上の経験があればよい」「当然マスターしているもの」「楽器が弾けることは必須」と弾けることを前提としている園があるのに対し、「好きで音楽を楽しんでくれればよい」と考えるレベル、「人間性、性格重視のためピアノは特別重要視しない (3 園)」など、意識の違いがみられる。

注目すべきは課題を出さない園22園のうち6園は、前述の保育者のピアノ演奏能力が「上手である」と、「大変上手」の項を100%と考える

園が入っていることである。逆に、100%上手と考えている園全体15園のうち6園は課題が採用試験に無い。弾ける人を採用するために課題を入れるという訳ではないようだ。前述のように80.7%の園にピアノの課題があり、さらにそれをどの程度重要視するかの記述では「重要視する」と明記された34園とある程度の重要視しているとした園を合わせると62園 (67.4%) あることから、ピアノの習得は就職にかなりかわる課題であることが理解できよう。養成校での音楽のピアノは選択科目になったが、幼稚園に就職し、保育現場に出るにはまだまだ重要視されているといえる。

(9) 保育者養成校でのピアノ授業への要望

問9 養成校でのピアノの授業に関する要望を、下記より選んで○印をしてください。(選択複数可、記述)

- ① 他に楽器が弾ければ、ピアノにこだわらない。
- ② やはりピアノは重要である。
- ③ 園ですぐに役立つ伴奏が弾けるとよい。
- ④ コードネームで伴奏ができるとよい。
- ⑤ 歌やリズムに即興で対応できるとよい。
- ⑥ 弾き歌いができるとよい。
- ⑦ その他 ()

「⑥弾き歌いができるとよい」が一番多く (表9参照)、次に⑤の「歌やリズムの即興での対応」を求める声が多かった。また「③園ですぐ役立つ伴奏」が要望されている。「④コードネームでの伴奏」も即興のための方法ということからピアノの授業で即興に視点をおく指導が求められるといえる。楽譜の演奏だけの授業でなく歌えることも大切、弾き歌いや場面に応じた伴奏法が求められている。「②ピアノは重要」と考えている園が60園 (53.1%) と半数以上であり、まだ、ピアノへのこだわりが多いが、①のように「ほかの楽器が弾ければよい」とする柔軟性も約3分の1弱の32園 (28.3%) にみられた。「⑥その他」の記述でも「現場で役立つ教材

の伴奏」が弾けるよう求める声が多くまた、「ピアノの基本はしっかり」といった、②と③の結果も含めピアノ重視は根づよく感じられる。保育の内容と即結びつくピアノの授業内容が求められているのが理解できよう。そのためにも保育現場を養成側がよく把握する必要性を感じる。

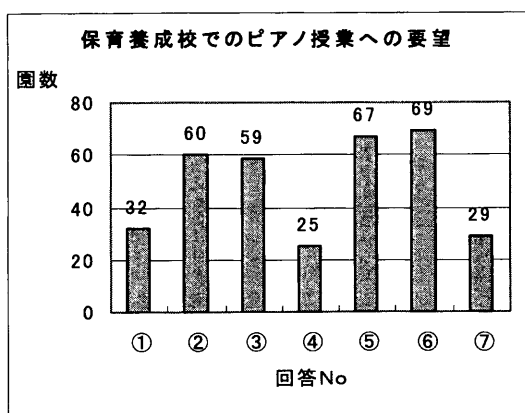
「歌をきれいに美しく音楽的に」「音楽を楽しむことができるように」といった意見のコメントも多く、音楽を楽しめる保育者を求めていることも心したい。

<表 9>

保育者養成校でのピアノ授業への要望
有効回答113園（複数回答可）

回答例	園 数	割 合
①	32	28.3%
②	60	53.1%
③	59	52.2%
④	25	22.1%
⑤	67	59.3%
⑥	69	61.1%
⑦	29	26.0%

<グラフ 9>



(10) 養成校でのピアノ指導以外の音楽に関するカリキュラムの要望

問10 保育者養成校におけるピアノ以外の音楽科目で現場の先生方に学んでおいて欲しかったこと、又これから先養成校に求めたいことをお書きください。
(記述)

自由記述を分類すると（複数回答）<表10>のようになる。ダンスや身体表現を求める声が最も多く、34園（30.1%）あり、身体表現としてのリトミックを含めると41園（36.3%）であった。次に歌の指導を求めているものが多く26園（23.0%）あり、音楽の授業に子どもの歌や発声法、きれいな歌の表現など、もっとカリキュラムの上に取り入れるべきであろう。聞き取りやすくしっかり、きれいに歌がうたえ、リードできるなら楽器の伴奏にこだわる必要も無くなる。声が立派な楽器となるはずである。手遊び24園（21.2%）、打楽器など、ピアノ以外の楽器の使い方21園（18.6%）、ギター16園（14.2%）、アコーディオン9園（8.0%）、リズム遊び9園（8.0%）、即興7園（6.2%）と続く。ダンス、リトミック、手遊びのように“動き”を伴った音楽活動を保育者養成に求められていることが理解できよう。

又、ギター、アコーディオン、打楽器、電子楽器など、ピアノ一辺倒の現状に改善の余地があり自由な講座の選択可能性を考えさせられる。即興やコード奏の要望が、(9)のピアノ授業への要望の中で一番高かったのにこの問いで低かったのは、即興、コード奏は、ピアノの授業、ピアノを使っの即興という認識が強いためと思われる。例えば打楽器やボディパーカッション、手作りの楽器など即興の可能性はいろいろあり、保育者に即興に対する応用の柔軟性が要望されるのではないかと感じた。

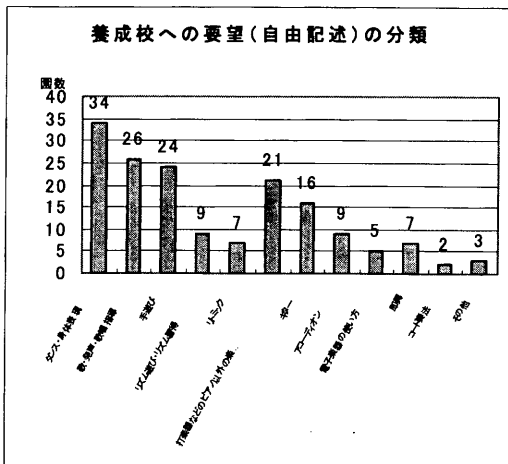
<表10-a>

養成校への要望(自由記述)の分類

有効回答113(複数回答可)

	内容	園数	割合
身体表現	ダンス・身体表現	34	30.1%
	歌・発声・歌唱指導	26	23.0%
	手遊び	24	21.2%
	リズム遊び・リズム習得	9	8.0%
	リトミック	7	6.2%
楽器	ピアノ以外の楽器の使い方	21	18.6%
	ギター	16	14.2%
	アコーディオン	9	8.0%
	電子楽器の使い方	5	4.4%
奏法	即興	7	6.2%
	コード奏法	2	1.8%
その他		3	2.7%

<グラフ10>



<表10-b> 自由記述一覧

1	いろいろなジャンルの曲に挑戦して高度な技術よりも温かみのある楽しい演奏を心がけ、努力して行って欲しい。
2	子供の好きなアンパンマンやドラエモン、トロ(さんぽ)なども弾けると日常的に役立つ。
3	ピアノはどれほど上手に弾けても差し支えない。ただし、ピアノに頼って肉声が不十分な人は教師に向いていない。ピアノよりも自分の声で美しく音楽的に表現できることが大切と思う。

4	基本をしっかりしておけば応用できるので、やはりピアノは重要と思う。
5	現在は全保育室、遊戯室にピアノを各一台設置されているので、保育上ピアノが中心になっている。
6	ピアノはやはりとても便利な楽器だと思う。(ギターも良いが、調弦をきっちりとやること、難に引かないこと)
7	ピアノの上手さと人柄とは必ずしも一致しない。大切なのは心だと思う。
8	ピアノが一番簡単な楽器であることを忘れるべきではない。
9	自分の出す音に敏感であってほしい。どんな時でも美しい音色を心がけて欲しい。
10	最近、楽譜をまともに読めない学生がいる。リズムをとってメロディーが引けるくらいの力は欲しい。子供に歌わせたい歌、子供と一緒に歌いたい歌など、先生自身が大好きな歌を求める気持ちを持って欲しい。
11	音楽そのものが楽しめる保育者になって欲しい
12	学生の時期にピアノで音楽を体験してきて欲しい。
13	保育に必要な楽曲をある程度の練習で弾けるようになるためには、ピアノに慣れているほうが良い。
14	ピアノに慣れていない人が苦手意識を持たずに、ピアノを楽しめるような指導であって欲しい。
15	ピアノなどの技術は幼稚園教諭に必要なものの一つである。
16	ピアノは大切だが、技法の上達より保育の中でいかに生かせるが最も重要である。
17	無理でなく人としての音楽性を養ってきて欲しい。特に気持ち良く歌える人になって欲しい。
18	即興演奏の楽しみ方、生かし方を指導して欲しい。
19	ピアノは弾けても歌えない教師が多いので、両方を可能にして欲しい。
20	園によってピアノの重要度が違うが、ある程度弾けるほうが良い。昔からの歌を知っていると良い。
21	子どもたちが喜ぶ雰囲気作りができることも大切なので、楽器の技術だけでなく先生自身が一番楽しんで子供の前に立てることを少しでも頭に入れておいて欲しい。
22	子供たちの顔を見て弾けない方は、無理をせず伴奏なしで歌う方が集中できて良いと思う。

23	学生時代にできるだけ弾いておいて欲しい。ピアノを弾くこと、練習することを好きになっていて欲しい。保育者になってからピアノの練習に時間をとられると、他の保育準備にも余裕がなくなり、保育者として生き生きと取り組めない。当園ではピアノ上達者ほど、日ごろの練習を怠らない。
24	無伴奏でも音程をしっかりとれること。
25	昼食の後などに、教師の生演奏で気分が落ち着く曲などを弾くようにしている。幅広いジャンルから素敵な曲を選び、レパートリーにすると良い。
26	子供たちと季節の楽しさを共有するのに、保育者も心にゆとりを持って音楽を楽しんで欲しい。ピアノは誕生会や式典など、行事にも弾くので、歌いやすぐ伴奏できるようにして欲しい。

VI. 全体的考察とまとめ

以上の結果から、次のようなことが考察でき、仮説を検証できる結果といえよう。すなわち音楽活動は保育現場で重要な役割を占め、音楽的活動を重視している園が非常に多い。ピアノが99.2% (表3-a) という高い比率、1園を除く全園で用いられている。かつてのように「幼稚園＝オルガン」ではなく、「幼稚園＝ピアノ」の普及である。又、約3割の園がピアノのみの使用であり、歌の伴奏などピアノへの依存が高い。残り7割がピアノ以外の鍵盤楽器を併用しているが、その中では電子オルガンの使用が一番多く、ついで電気ピアノであった。自動演奏装置や自動伴奏装置のような機能を持つ機器の導入はまだまだ10園(8.7%) (表5-a) と低かった。しかし、養成側にダンスなど「動き」を伴う活動やピアノ以外の楽器の奏法を学ぶことを望んでいることから、自動演奏装置や自動伴奏装置等の機能を利用することで、より有用な活動ができるようになる可能性があると考ええる。

ピアノに対するこだわりは、ピアノが人工音の楽器では表現できない指先のタッチや奏法による音色の微妙なニュアンスの変化が即時に可能であり、演奏者の感性、技術の高さ、表現力に対応できる点からも肯ける。これは保育者が子どもにすぐ反応し対応できる技量があり、ピ

アノの能力が高い場合のメリットであり、音色や音楽的表現まで及ばない楽譜を弾くだけで精一杯のレベルではせっかくのこの利点も生かすことができない。逆にピアノのデメリットである移動不可能、子どもに面した演奏がしにくい等のことを考えれば、キーボード、アコーディオン、ギターなどの良さが今後見直されるであろう。すばらしい生演奏で音楽的に即時対応できることに越したことはないが、保育者が楽譜にしがみつきの状態で音楽的にゆとりのない演奏であるなら、より音楽的なCDやオーケストラなどの伴奏ソフト、また、自分の最良の演奏を録音して使うことのできる自動演奏などを上手に利用する方が、一番音感の発達する時期の音楽教育には効果的と考える。今回の調査では保育者の演奏能力が高いと評価している園が多く、現場の力量に満足している園のほうが多かったことから、自動演奏装置などの導入に「積極的な賛成」より「条件付き賛成」という傾向があった。電子楽器、機器はパソコンと同様、機種の変化、多様化がめまぐるしい。さまざまな楽器音が可能な音色の変化、子ども声にあわせての自由な移調、音量の幅の広さ、リズム楽器を加えたアンサンブル、容易なテンポ変化、又録音機能を生かすことで保育の生演奏の再生、カラオケの伴奏など、電子楽器、機器は一台で様々な機能を生かすことができる。録音機能は動きを伴う活動の時、保育者が子どもたちと一緒に動ける点で大変役立っている。また、調律が不要という維持メリットもある。電子楽器の鍵盤を単にピアノの代用として使うのではなく、これらの楽器の機能をこなし、上手に生かせるための努力と音楽的センスがあればピアノより幅広い音楽的可能性が広がるはずである。

これだけ音楽が保育の活動の中に入り込み、重要視されている中、子どもの動きやテンポに保育者が合わせ、即時反応でき、子どもの創造的な可能性を引き出せる力量があるなら、子どもたちはもっと能力を伸ばすことができ、のびのび自己表現できるのではないだろうか。どう

しても保育者の力量の枠の中で子どもたちの能力を押し込めてしまいがちな怖さを感じるだけに保育者は現状に満足せず、可能性に積極的に立ち向かう姿勢を持ち合わせていきたいものである。

みどりヶ丘幼稚園でも自動演奏装置の導入でこれらの機能を使いこなし、保育にスムーズに生かせるよう試行錯誤している現状であるが、すでに「動きを伴った活動がしやすい」「子どもものキーに合わせた伴奏ができる」「適切な音量でBGMに利用」等使いこなせることでいろいろな効果が報告されている。これらを来年度の事例報告としたい。

共同で企画研究を行ったものである。今回の報告はその第一報である。本研究の当初より、本学非常勤講師笠井かほる氏の参加を得て、ご協力いただき、ここに感謝を申し添える。

<注>

- 1) 『保育者養成におけるピアノ指導に関する研究Ⅴ ―卒業生への追跡調査を通して―』
宮脇長谷子・井口太・笠井かほる 日本保育学会誌 第49回 1996
- 2) 『保育における音楽活動と電子楽器・機器の導入について ―幼稚園の調査から―』
笠井かほる 日本保育学会誌 第54回 2001